

(様式3)

## 博士論文の要約

氏名 石川 巧

論文題目 戦中・戦後の稀覯雑誌と出版文化に関する研究

本論はアジア太平洋戦争の末期から戦後占領期にかけて発行された総合文芸雑誌、および、同時代の印刷と雑誌出版に関する研究をまとめたものである。本論がとりあげた雑誌は、いずれも国会図書館をはじめとする日本国内の図書館、資料保存機関に揃っておらず、これまでの研究においてほとんど言及されることがなかったもの、すなわち、戦後の出版文化史に痕跡を残していないものばかりである。論文タイトルの「稀覯雑誌」という表現はそこに由来している。いままで世に知られていない雑誌の紹介と分析を兼ねているため、本論では原則として総目次を作成して各節の末尾に補助資料として添付した。また、各節の内容はすでに単著や共著、復刻版の解題などで活字化されている。

序論では戦前における内務省の検閲と言論統制の仕組み、戦後占領期におけるGHQの検閲、「紙飢饉」とセンカ紙ブーム、出版界の復興について概説し、同時代における出版界の状況を概観した。特にセンカ紙ブームについては多くの分量を費やし、戦後の出版文化における裏面史を明らかにした。

第1章は戦中・戦後に全国の新聞社が発行した総合雑誌のなかでも、特に著名作家が数多く寄稿するなどして出版文化に重要な役割を果たしたと考えられる雑誌として『月刊読売』、『月刊毎日』、『月刊さきがけ』、『四国春秋』を論じた。『月刊読売』は戦時下から戦後占領期にかけて継続発行された唯一の新聞社系総合雑誌であり、マスメディアが敗戦をどのように跨いだのか？戦前のイデオロギーを脱ぎ棄ててGHQの占領政策に阿るためにどのような言論操作を行ったのかを考察した。『月刊毎日』は1944年秋から1945年8月まで外地の北京で発行された日本語雑誌であり、その発見自体が大きな意義をもっているが、本論では雑誌刊行直前まで毎日新聞社の主筆だった阿部眞之助がフィクサーとしての役割を果たしていたという立場から論を展開し、大佛次郎、石川達三、壺井栄、佐多稲子、尾崎士郎などの新発見小説を分析した。さらに、同誌に寄稿した中国人作家、中国文学者たちの取り組みにも注目し、この雑誌が日本と中国のありうべき関係性を模索していたことを明らかにした。

『月刊さきがけ』の場合は、当時秋田に疎開していた作家伊藤永之介と鶴田知也を基軸とした作家のネットワークがあったことを突きとめ、両氏が中心となって県民の生活改善、文化向上をめざして発行された雑誌であることを指摘した。『四国春秋』の場合も、ご当地出身の菊池寛が仲介役となって文壇の大御所作家や気鋭の論客を紹介していたことを指摘した。『月刊さきがけ』や『四国春秋』はルポルタージュ、ドキュメンタリー、座談会などを駆使して読者を飽きさせないための工夫を凝らしており、1950年代に訪れる空前の週刊誌ブームに接続する問題を数多く内包している。

第2章では戦後占領期の世相を反映するものとして、女性雑誌『国際女性』、インテリ層を対象とした総合雑誌『新生活』、原節子の貴重なエッセイを収録する随筆雑誌『想苑』

を論じた。『国際女性』の場合は、戦時中に日本とドイツの航空軍事業界で通訳として活躍した徳丸（末永）時恵が戦後に婦人運動家へと転身し、京都で国際女性社を興したこと、彼女が自分の故郷に疎開していた谷崎潤一郎に働きかけて『国際女性』の顧問になってもらい、その見返りとして京都移住を実現させたこと、谷崎潤一郎の人脈で多くの人気作家が作品を寄せるようになったことなどを論じた。

『新生活』に関しても、雑誌の特性や主要記事の紹介、文芸欄の考察などを行った。同誌の特徴は、当初 GHQ から保護を受けていた痕跡があるにもかかわらず途中から検閲が厳しさを増し、遂には廃刊（表面上はタイトルと編集委員の刷新）に追い込まれていることである。逆にいえば、同誌の内容を追うことで GHQ がどのような文章に神経を尖らせ、何を抑圧しようとしたのかが詳らかになるのである。

『想苑』に関しては雑誌の内容そのものよりも同時代の原節子に焦点化して論じているため、やや他の節と傾向が異なるが、義兄・熊谷久虎の影響、彼が深く加担していたスメラ学塾や九州独立運動などとの関わりを説き、原節子のエッセイ「手帖抄」を精読した。

第3章では、欧米文化の浸透に役立つとして GHQ も推奨した探偵小説雑誌のなかから『妖奇』と『黒猫』を取りあげ、それぞれの出版形態、誌面構成、内容を論じている。一方の『妖奇』は既発表作品の再録雑誌から出発し、二流雑誌の扱いを受けつつも、カストリ雑誌ブームに乗って広く読者の支持を集めるようになった娯楽雑誌であり、もう一方の『黒猫』は当時最も洗練された雑誌出版社のひとつであったイヴニング・スター社が手掛けた品格のある探偵小説雑誌であるが、海外作品の翻訳をうまく進めることができなかつたため短命に終わっている。それぞれを比較して読むことで、江戸川乱歩を中心とする日本の探偵小説作家たちの試行錯誤が見える。

第4章では占領期文化の象徴ともいえるカストリ雑誌とその周辺に焦点をあて、占領期のカストリ雑誌に関する総論、広義のカストリ雑誌＝大衆通俗雑誌のなかの原爆表象、そして、1950年代に発行された『小説春秋』と松本清張のミステリーについて論じた。

第5章では、戦後日本の地方出版文化を牽引した福岡に着目し、同地域の製紙、印刷、出版事業のありようを検証するとともに、『紙と印刷』、『九州演劇』という雑誌を分析した。なお、第5章は戦後福岡の都市文化と深く関わる問題を提示している内容であるため、補助資料として戦後福岡復興年表を付している。

第6章は本論の結論である。本研究は新資料の発掘と詳細な情報開示を目的としているため、その記述スタイルは解題的なものにならざるを得ない。つまり、一般的な文学研究のように筆者が自分の問題編成や分析に基づいてテキストを論じるのではなく、その雑誌の内容およびそれに関連する諸言説を遍く収集・紹介していく形式になってしまうのである。本論を読むと冗長な引用の記述が続き退屈さを覚えてしまうかもしれないが、その理由はひとえに“事実を並べる”という手法で記述されていることに拠る。多くの節では末尾に総目次を添付しているが、それも上記のような事情に伴う必然的な内容であると考えている。

本論を構成するうえで特に留意したのは、海外進出による領土拡大、侵略戦争の遂行というかたちで軍事国家としての色合いを強めていった日本が、敗戦後にそれをどのように総括し、どのようにして言論の主体性を獲得していったのかを見極めようとするところだった。“GHQ 主導による言論の自由の獲得”という短絡的な歴史認識ではなく、個々の雑

誌、個々の書き手がそれぞれにどのようなことを考え、どのようなかたちで戦後の言論状況を作りあげていったのかを再考することだった。問題意識の根底にあるのは、当時、〈地方〉から〈中央〉に向けて発信された言論・表現のありようを考察するとともに、それがどのようなかたちで 1950 年代以降の娯楽雑誌、大衆雑誌ブームと接続しているかを明らかにしようとするものである。また、戦後占領期から 1950 年代に至る雑誌出版文化の流れを、特に地方文化運動という観点から通史的に追うことで、戦時中／戦後、占領期／朝鮮戦争以降の言論状況における断絶と連続性を両義的に捉えることに主眼を置いている。